第30号

Viva Kango

Campus News of the Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

日本赤十字北海道看護大学

平成二十二年度 看護研究演習発表会

平成二十二年十二月十日(金)、看護研究演習発表会が開催されました。今年度は、四年生の学生計一〇四名による六十演題の発表が行われました。発表は、基礎・成人看護実習室、母性・小児看護実習室、地域・老人看護実習室の三会場に分かれて行われ、学生が主体となって運営にあたりました。発表形式はポスター(示説)発表であり、五分の発表時間と二分の質疑応答時間が設けられ、活発な意見交換の場にもなりました。発表された研究は、どれもオリジナリティーに富み、また困難なテーマに挑んだ足跡を窺うことができました。参加者には三年生の学生も多く、来年度に研究に取り組む上での多くのヒントを得たようでした。

四年　青山　敬子

私は、臨床で働く看護師の方々を対象に実態調査研究を行いました。研究については授業で学習していましたが、一人で文献を読み、分析・考察など、発表まで行うのは、やり方は同じでも大変苦戦しました。今まで明らかになっていないことを今回の研究でどのように明らかにしていくのか、文献検討をして初めてそれがわかり、立てた仮説と結果が同じであったのか、異なっていたのか再度文献検討をしたものと照らし合わせながら考察していく。発表までの研究過程を終えて、文献を論理的に理解していくことの大切さをとても強く感じました。臨床で、研究を行う際はこの経験を活かし、よりよい看護に寄与できるように取り組みたいと思います。

四年　濱名　亜実

振り返ってみると十二月から始まってから一年間があっという間でした。なにをすればよいかもよくわからずにとりあえず文献を読んでいたのですが、興味のあるものを見つけるには、いろいろな文献に目を通すことから初めてみるので良いと思います。研究は時間をかけてじっくり進むものなので、本当に興味があるテーマでないと意欲喪失してたと思います。私は助産領域の田中教員の研究室に入れ、先生のおかげで最後まで楽しく研究が進められました。十二月の初めには一年間のスケジュールを組み立てました。研究は時間に決まりがなく実習と平行することもあると思うので、自分なりのスケジュールの組み立てはおすすめです。

私はパソコンも統計学も本当に嫌いでなにも知らない状態だったのでアンケート作成前や集計・検定は苦痛でした。でも結果がでれば、研究はすごく興味深くて楽しいです。苦手な方は訳がわからなくなって苦しむ前に絶対統計の勉強はしておいた方がいいです。あとは研究は早く始めることです!十二月から始めても、結局締め切りぎりぎり、発表前のポスター作成時に、もっとこう書けばよかった!と思うところも出てきます。

研究を通して、協力者の方への依頼や書類作成、正しい言葉使いなども学ぶ機会がたくさんあると思います。大変なこともあると思いますが、楽しく興味のあるテーマを決めてがんばってください。

四年　吉田　なつよ

私は研究をする際にテーマが決まらず焦ることがありました。でも日頃から周りに関心を持つことにより、ちょっとしたきっかけで研究したいテーマを見つけることができました。

今回、文献研究をしましたが本当に自分が研究したい内容の文献がなく困りました。しかし、自分のテーマに関わる文献を読んでいくうちに新たなテーマを見つけることができ、論文作成をすることができました。論文作成では自分の考えや、担当の先生からアドバイスを受ける等して納得のいく研究ができ、無事発表をすることができました。

今回の看護研究演習を通して研究がどのようなものなのかを知ることができました。今回の学びを今後にいかしていきたいと思います。

四年　安土　和哉
岩原　史典

僕たちは薬理学の領域で、実習中のストレスを唾液によって測定するという実験研究を行いました。僕たちの実験研究では実習と研究を同時進行しなければならず、両立にとても苦労しました。また、実習を終えてからは膨大な実験データの分析をしながら、一方では日々迫り来る国家試験勉強にも力を注がなければならず、研究と勉強とのバランスが難しく感じました。しかし、今回の研究で基礎を学ぶことで今後の看護研究に活かしていくことができると感じました。そして、大学で実験研究を行うという貴重な経験は僕たちにとって一生の財産となりました。今回の研究でお世話になった先生や被験者の皆様に深く感謝いたします。

平成二十二年度 日本赤十字北海道看護大学 国際看護プロジェクト主催講演会

本学国際看護プロジェクト主催の講演会が十月二十二日(金)、十一月九日(火)の両日、それぞれ午後六時から本学講堂において開催されました。第一回目は大石時子天使大学大学院教授が「国際人としての在り方を考えよう!~ウイメンズヘルスを通して~」(聴講者百三十四名)という題名で、第二回目は澤田愛子本学教授が「ホロコースト(ユダヤ人大虐殺)を生き残った人々~海外での調査~」(聴講者百四十二名)という題名で講演をされました。

大石先生は日本と米国の看護の違いなど、ご専門とされる看護のお話に加え、現在、世界で起こっている女性の健康に関わる人道上の問題、例えば人身売買や恋人間暴力の問題などについてお話をされました。お話しを通じて大石先生はたとえ世界の一隅で仕事をしていようとも常に広い視野を持って自分の仕事にあたることが大切であり、そのような姿勢で生きることが国際人につながるということを訴えられました。

澤田先生は第二次世界大戦で起きたホロコーストの悲劇について、先生の長年に亘るフィールドワークに基づいてお話をされました。ユダヤ人と呼ばれる人たちがなぜ迫害されるようになったのかという歴史的背景から説き起こし、ホロコーストの凄惨な中味、ホロコーストを生き延びた人たちの今なお消えることのない心の苦悩、苦悩は当事者だけではなく第二世代、第三世代の子孫にも及んでいるということをお話されました。歴史の悲劇に対する「忘却」と「無知」は犠牲者を二度殺すという主旨のご発言をされましたが、平和な世界を求めるならば心に銘記すべきお言葉ではないでしょうか。

国際人となるためには、世界の同時代を知り、過去を知り、そこから学んだことを正しい形で自らの生活に活かすことが大切であるということ学んだ講演会となりました。貴重なお話を聴かせていただいたお二人の先生には心より感謝を申し上げます。

「ひらめき☆ときめきサイエンス」

「ひらめき☆ときめきサイエンス」とは、科学研究費を獲得した研究者が大学で行っている研究成果について、小学校五・六年生、中学生、高校生を対象に科学講座を企画し、日本学術振興会へ申請を行い採択され行われる事業です。本学では『「見えない」障がいをもつ人と、会って、話して、遊んでみよう』(実施代表者:吉谷優子、十月二日実施)と『筋肉の疲れをとる方法 —炭酸ガスを多く含む温泉(炭酸泉)の効果—』(実施代表者:山本憲志、十一月六日実施)が採択され、それぞれ実施されました。

吉谷優子講師担当の講座では社会福祉法人北の大地の適所利用者の方たちにご協力頂きました。最初に「ノーマライゼーション社会の実現を目指して」と題した講義の後、精神障がい者、子ども達、施設の支援員、プログラム実施者を交えて絵画作成を行いました。絵画のテーマは「ノーマライゼーションを実現された将来のまち」であり、作成後は作品の発表会を行いました。講座は終始和やかに楽しみながらノーマライゼーションについて学習を深めました。

山本憲志准教授担当講座は、近年、人工的に作製可能となった炭酸泉が筋疲労に与える効果について生理学的観点から最新データの解説と実験を行いました。まず、「筋肉の収縮と疲労を考える」(担当:根本昌宏)、「炭酸泉の歴史と効用」(担当:山本憲志)の講義を行い、筋肉、炭酸泉の基礎知識を学習しました。その後、マッスル・センサーを用いて筋収縮の電気現象を観察し、場所を実習室に移して足浴実験を行いました。実験は不感温である三十五℃の炭酸泉と水道水を左右それぞれに足浴し、同温にも拘らず炭酸泉で皮膚の紅潮、温感の増強を観察すると同時にサーモグラフィーを用いて皮膚温の変化を捉えました。

いずれの講座も受講生は各課題に熱心に取り組み科学の面白さに触れる事が出来ました。そして最後に石井学長から「未来博士号」が授与された。

両講座にご協力頂いた関係者の方々に感謝申し上げます。

考えよう！備えよう！『防災セミナー』
守りましょう！大切な人を そして地域を！

十月十六日、十一月二十日の二日間にわたり、「考えよう！備えよう！『防災セミナー』―守りましょう！大切な人を そして地域を！」と題して、市内高校生を対象に防災セミナーを開催しました。

本プログラムは、防災教育の視点から、災害に対する知識・技術を身につけ、防災・減災のために事前に備え行動する能力を育成することを目的としたセミナーです。

災害についての基礎的な知識を、本学の尾山とし子准教授より「災害に関する知識」と題して講義していただいた後、避難所生活などについて簡単な講義をした後で、災害図上訓練（DIG：Disaster Imagination Game）について説明がありました。災害図上訓練は、大きな地図を囲み、災害対策のイメージトレーニングを実施するものです。

最初にグループごとで北見の市街地図を囲み、地震が起こったときの危険箇所や避難場所を探して地図に印をつけました。次に、避難の時の怪我や食料の調達に役立つように、病院やコンビニエンスストアなども探して印をつけました。災害弱者のお年寄りや、障害のある方、子どもや妊婦さんなどが多くいる場所も探しました。

最後に自分の家から危険な場所を避けて、目的の避難場所にたどり着けるか、参加者一人ひとりが避難経路に印を付けていきました。時間と共に立ち上がって「わいわい、がやがや」と楽しそうに地図に頭を寄せていたのが印象的でした。最終的に、皆さん、無事に避難できたようです。

お昼には、非常食の試食会。スパゲッティやカレーピラフ、五目ご飯など、どれもお湯を注ぐだけで本格的な味わいでした。

その他、三角巾の使用方法についてのミニ講座も行い、日頃は意識していない災害発生時の対応について再確認しました。

世界各地で災害が発生している昨今、地震等の災害が少ない北見地域ではありますが、改めて災害について、備えや人とのつながり・助け合う心の大切さについて考える一日となりました。

本セミナーは、平成二十二年度「赤十字看護・介護に関する研究助成事業」の一環として行なわれました。

公開講座
「おいしいごはん、できました。」

南極料理人　西村　淳　先生

平成二十二年十一月二十八日に本学で西村淳氏による『おにぎりon トークショー』が行われました。西村淳氏は映画「南極料理人」の原作者であり、現在は株式会社オーロラキッチンを設立して、食を通した様々な活動を全国で展開されています。

トークショーに先立つ第一部では、「南極料理人」の上映が行われました。酷寒かつ限られた食料という制約の多い環境下にもかかわらず、観測隊員らの様々なリクエストに応えてアイディア溢れる料理を創作する西村氏の奮闘ぶりは、笑いを誘いながらも引き込まれるものでした。第二部のトークショーでは、ドームふじ基地での実際の暮らしぶりが紹介されるとともに、チャーハンの作り方が実演されました。フライパン一つで専門店のようにぱらりとした仕上がりにするためのコツの伝授を通して、西村氏は被災地のような環境に置かれたとしても愛情と少しの工夫で美味しくできるということ、そして、料理が最高のコミュニケーションになることを強調されていました。参加者には西村夫妻手作りのおにぎりと豚汁が振る舞われ、心もお腹も満たされた貴重なひとときでした。

平成二十二年度 赤十字災害救護訓練

九月十六日の秋晴れの日に、平成二十二年度赤十字災害救護訓練が行われました。

今年度は釧路市にて実施され、当校からは傷病者役として学生五十一名が実働訓練に参加し、教員三名と事務職員二名が引率しました。傷病者になりきるためにメーキャップをし、設定された役になりきって救援を求める姿は、本番さながらの緊迫感がありました。

訓練終了後、学生からは「最初誰も来てくれなくて不安になった」、「声をかけられるととても安心した」「赤十字ならではの訓練に参加できてよかった」など多くの気づきや学びがありました。

今後もより多くの学生が、赤十字の活動に参加できる機会を増やしたいと思います。

国際救援疑似体験ツアーに参加して

三年　木下　洋平

私たちは今回、GW中二日間にわたって大阪赤十字病院で行われた国際救援疑似体験ツアーに参加しました。参加者は全国の赤十字看護大学の学生で交流も含め楽しく、よい経験となりました。また、スタッフは海外派遣経験豊富な方が多く、現地でのリアルな経験を伝えていただきとても興味深かったです。

内容は海外で大地震が発生したとき日赤職員として自分はどうするか、援助にいくには何が必要かなどを小グループで考えていくというものでした。

実際に救援に使用するERUのテント設営やGPSを使用した宝探しゲーム、救援物資に触れるなどの経験もすることができました。

漠然と憧れていた世界を疑似的に体験することができ、「憧れを目標へ変えてもいいんだ」という気づきを得るきっかけになりました。

奨学金貸与状況

平成22年12月1日現在

名　称	貸与金額	1年生	2年生	3年生	4年生
日本赤十字社北海道支部奨学金	年額　60万円	53	69	68	63
日本赤十字社看護師同方会	月額　2~3万円	1	1	3	1
北海道看護職員養成修学資金	月額　3.2万円	2	2	4	2
北見市立大学生奨学資金	年額 60万円限度	32	32	35	19
北海道厚生連奨学金	月額4万円~8万円			1	1
日本学生支援機構 第1種奨学金	月額5.4~6.4万円	16	22	14	12
きぼう21プラン奨学金	月額 3~12万円	49	42	32	35
仙台赤十字病院奨学金	年額　60万円				1
武蔵野赤十字病院奨学金	年額　60万円			3	1
さいたま赤十字病院奨学金	年額　60万円				1
横浜市立みなと赤十字病院奨学金	年額　60万円			1	1
秦野赤十字病院奨学金	年額　120万円	1			
名古屋第一赤十字病院奨学金	年額　48万円		1		1
日本赤十字社和歌山医療センター奨学金	年額　60万円	2	3	1	
日本赤十字社福島県支部奨学金	年額　120万円			1	
日本赤十字社千葉県支部奨学金	年額　75万円	1			
日本赤十字社兵庫県支部奨学金	年額　60万円	1			3

編集後記

暦の上では立春を迎えましたが、皆様如何お過ごしでしょうか。国家試験を目前に控え、学内には張りつめた空気が漂っています。春を迎える前の試練の時ですが、学生達が必死に頑張る姿には、いつも胸が熱くなります。四年生全員に満開の桜が降り注ぐことを願ってやみません。

日本赤十字北海道看護大学学内誌
Viva Kango
日本赤十字社
第30号

発行日／2011年2月15日
編集・発行／広報委員会
〒090-0011 北海道北見市曙町664-1
TEL(0157)66-3311 FAX(0157)61-3125
mail to : kouhou@rchokkaido-cn.ac.jp
http://www.rchokkaido-cn.ac.jp